

2018年1月28日<降誕後 第4主日礼拝>

飯川雅孝牧師

招詞：ロマ書1章16-17 聖書：ロマ書5章20-21、ガラテヤ書2章18-20

説教： 『マルティン・ルター『95ヶ条の論題』』

高等学校の世界史の教科書には必ずマルティン・ルターの宗教改革が載っています。わたしの大学時代のゼミの友人にカトリックの信徒がおりました。彼は「マルティン・ルターという人はなに？」と、むしろ否定的に受け止めた発言をしましたのでアレッと思いました。昨年は1517年の宗教改革以来500年、プロテスタントもカトリックも記念祭で和解をしたという事です。カトリックにはナチスのアウシュビッツで隣人に自分の命を譲ったコルベ神父やマザー・テレサのような偉い人がおりますから、むしろ尊敬しております。今日の説教はルター当時のローマ教会に問題があったと受け止めて下さい。さて、ヴィッテンベルク大学の教授であったルターは城内の教会の門扉に『95ヶ条の論題』を貼り出したとあります。ルターは当初、それほど大きな問題になるとは思っていませんでした。しかし、結果としてはキリスト教徒の魂を変え、当時の政治や社会を変えてしまうという一個人としては途方もないことを行いました。彼の提起した問題は宗教のみならず政治や社会にも関わりますので時間の許す範囲で触れてみたいと思います。

#### 1. ルターの信仰と『95ヶ条の論題』

まず、当時のヨーロッパの死生観を見てみましょう。今と比べて医療は発達してなくて衛生状態も悪い。だから、病気になれば死ぬ人が多い、たとえば歴史的にヨーロッパでもペストの大流行では3人に1人が死ぬようなことも何回かあった。若くしてあるいは幼くして死ぬ人も多く、平均寿命は今と比べられないほど低い。身近に死への恐怖を感じたことでしょう。キリスト教の世界ですから、この恐れは神に赦され、天国へ行けるかどうか人々は毎日心配して祈っていた。ルター自身も22歳の時、雷に遭って命乞いをし、法律家と立身出世する道を捨て、修道士として生涯を捧げるように人生の方向を変えられたほどです。このように考えると、真摯な彼には、「神を前にして、正しいとは思えない自分は生きる屍でしかない。」と修道院の中で悶々としていました。考えに考え抜いた末、とうとう、今日の招詞にあるように、「神の義とは、正しさに耐えられないわが身を、神がイエスの十字架によって引き受け、正しいとして下さる。」と百八十度、意識を転換させた。闇から光の中に招き入れられた。この世のものとも思われない至福の瞬間が彼の全身に走った。これがルターの有名な信仰義認論「信仰による義人は生きる」の考え方であります。こう考えると「信徒が教会の sacrament に与り、聖職者の導きに従って罪赦され心の平安を得ることなら受け入れられる。しかし、ローマ教会が売る「贖宥状」を買えば罪赦されて天国に行ける。というのは自分の考えと合わない。」彼は七年前に自分たちの修道士会の紛争でローマ教皇に訴えに行った修道士のお伴でローマに行った経験もあり、現実のローマを見て来て頹廢的な面も見てきている。また、地元ドイツでローマ教会のために働き、自分たちの仲間を搾取している人たちにも不満もある。そのローマ

教会はこの「贖宥状」を自分の国で売ってぼろ儲けをしている。そのような現実を知っているから、以下のように質問したのです。

(36) 真に痛悔したキリスト者であれば、贖宥の証明書（贖宥状）なしでも、その人が当然得ることができるはずの罪と罪過からの十分な赦しをもつ。

2. ドイツのみならずヨーロッパの知識人が大きな反響を示した理由は次のことによります。

この印刷物は、普通の人を読めない教会用語であるラテン語で書かれていましたが、皆が読めるドイツ語に翻訳され、ゲーテンベルグの印刷術の効果により、たちまちドイツやヨーロッパ全域に広がり、大きな反響を呼び起こします。当時、ドイツの神聖ローマ帝国を食い物にしていたローマ教皇主義者たちを懲らしめるためには千載一隅のチャンスだと宗教には関係のない政治家や商人たちもおもったからである。少し、付け加えますと、キリスト教の歴史はローマ帝国による迫害の後、四世紀に国教となります。800年、ローマ教皇（レオ3世）はフランク王カール大帝に戴冠し、昔のローマ皇帝の位を与えます。ローマ皇帝の復活です。その後、同じく戴冠によって962年「神聖ローマ帝国」が生まれ、しだいにドイツ人の王に戴冠し、イタリアの地域ではないのに、ドイツの王は戴冠によって「神聖ローマ帝国」の王となるようになった。だから、ドイツの国民はローマ教皇の食べ物にされていた。だから、ドイツのみならずヨーロッパ中の人に大きな反響を与えました。

3. ルターは政治的な争いの中に巻き込まれて行きます。

このような中で、ルターが登場し、最初の宗教的な熱情を越えてドイツ国民とローマの教皇主義者、国内のローマ主義者と反ローマ主義者の政治的争いの中に巻き込まれて行きます。『95ヶ条の論題』を出した次の年、ドイツのアウグスブルグで異端審問を受けます。負ければ火あぶりの刑です。ローマ教会からの追及が激しくなります。風雲急を告げて、ルターは自分の方から立場を明確にするため、次の翌々年、1520年に、西欧の知識人・目覚めた宗教者に大きな影響を与えた宗教改革の三大文書をわずか1年間で表します。

・『**キリスト教会の改善について**』：ローマ教皇のドイツ国内への干渉の仕方が、人事やお金のとり方も問題があるとして、激しく攻撃しています。

・『**教会のバビロン捕囚について**』： sacramentについて、ローマ教会の規則や規定は聖書に基づいていないとし、従来の7つから、「聖餐」・「洗礼」・「告解」の三つだけを認めている。この書では法王が反キリスト的であるとはっきりと非難している。

・『**キリスト者の自由**』ここで述べられていることは基本的には先ほど述べたルターの有名な信仰義認論「信仰による義人は生きる」の考え方であります。信仰が与えられると、律法から解放されて、喜びに満ちた生き方にかわり、人は魂の根源から善行をするように促されます。イエスがバプテスマのヨハネについて、「神の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」と言われたように、キリスト者は誰にも従属しない自由を持っています。また、イエスが「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上

に立つ人は、仕える者のようにになりなさい。」だから、この世の隣人との生活の中で他者への愛に基づいて生活できるようになる。このように、キリスト者は神に赦されたものから、キリストに似せられて聖なる者へと変えられて行くのであります。そして、当時のローマ教会の現実に触れて考えを述べます。ローマ教皇は天国に通ずる鍵を預かるペトロの後継者と主張するから権威ある存在であります。彼がバチカンの聖なる座から発する教えは無謬であり、それこそがキリスト教であった。しかし、もし教皇も間違いを犯す可能性があるとしたら、何によってその誤りを正すことができますか。ルターが行き着いた結論は聖書でした。ルターはここで、教皇の権威に対して聖書の権威を前面に出します。しかし、この時代、聖書は書き写しのため、非常に高価でしたし、先ほど述べたようにラテン語で書かれていました。だから一般の人には手に入らず、読めませんでした。これを可能にしたのが、ルターがドイツ語に訳した聖書であり、グーテンベルグの印刷術によって普及されたのであります。そうになると、誰でも聖書は読めるようになり、「万人祭司」という考えが出てまいります。この書物が出版されると、いよいよ、ローマ教皇は1521年初め、ルターを破門します。ここに両者の対立は決定的となります。

4. その後、ヨーロッパはスイスのジュネーヴにおけるカルヴァンらの教会改革から始まって、キリスト教世界をカトリック教会とプロテスタントに二分することとなり、同時に社会と政治の変動をもたらしました。イギリス宗教改革はイギリス国教会のカトリックからの離反と言うかたちで行われました。宗教改革はヨーロッパの精神世界と政治世界においても最高権威であったローマ教皇を頂点とした教会支配を脅かすものであったので、その動きに対抗して、カトリック教会でも対抗宗教改革が試みられ、大きく変化しました。またほぼ同時期に展開されていたルネサンス、大航海時代との密接に結びつき、ヨーロッパ世界の近代への移行を準備したと言うこともできます。新旧二派の対立は、深刻かつ広範囲な宗教戦争に転化し、ほぼ17世紀まで続きました。この宗教戦争を経ることによりヨーロッパには主権国家が形成されていきます。

#### 5. ルターの限界

ルターはあまりに大きなことをしたので、彼の限界として否定的にいうことはできませんが事実としては知っておかなければならないこともあります。

没落しつつあった騎士階級がルターに同調して騎士戦争を起こしたが大領主たちに鎮圧された。また、教会から搾取されていたドイツ農民がルターを支持して蜂起し、ドイツ農民戦争が起こった。しかし、ルターは結局これらの武装闘争に反対し、いずれも鎮圧された。

また、ユダヤ人に対しては初めは、旧約聖書の預言がイエスを指し示していることをユダヤ人に説いて、彼らがキリスト教に改宗することを求めましたが、彼らが改宗しないので否定的な見解を取りました。

一修道者の魂の救いが、これほどまで世界に大きな影響を与えたことは、神のみわざと考えなければならぬと思います。